『患者から友へ』

昨年１０月下旬、Ｔ君夫妻が函館にやってきた。私にとって、とても嬉しい来訪者であり、楽しい時間を過ごすことができた。ちょうど、この時期は紅葉もピークを迎えていた。私は２人を車に乗せ、大沼湖畔を１周しながら周りの美しさに目を奪われつつ、１０年前のことを思い出していた。遡ることちょうど１０年前の１０月、Ｔ君は骨髄移植という過酷な治療を受けていた。

Ｔ君との出会いは骨髄移植を行う約１年前であった。骨髄の障害により、赤血球、白血球、血小板という血液の成分が全て減少し、結果として強い貧血をきたし、感染や出血が起こりやすくなる病気を彼は患っていた。色々な治療を行ったが、いずれも効果は短く、２３歳という若い年齢からも、骨髄移植は、最も期待できる治療であった。

幸い、兄とは白血球の型（ＨＬＡ）がピッタリと一致していた。色白で細身のＴ君は若くして厳しい病気を患いながらも、いつもひょうひょうとした笑顔を見せてくれ、ぼそぼそっと独特の喋り方で、スタッフと冗談をかわすことも多かった。多くの血液がんの方が入院されている病棟の中で、看護スタッフは心休まる時が少なかったが、彼の存在は、同世代ということもあり、スタッフの心をもほっとさせるものがあった。私もその中の一人であった。

厳しい前処置（大量の免疫抑制剤の投与と放射線照射）によりＴ君の骨髄をあえて空っぽの状態にした後、１０月１日に兄より採取した骨髄を点滴で注入（移植）した。

19 日目、血液の成分が増えはじめ、彼も家族も、そして我々スタッフもほっと胸を撫で下ろした。無菌室で彼と記念撮影をしたが、私の指は思わずピースマークになっていた。しかし、事態は予想しなかった方向へ走り出した。１１月に入ってから、血液の成分が再び減り始め、１２月中旬頃には移植前の状態に逆戻りしてしまったのである。

私は落胆する間もなく、原因の解明と改善策を考えることに追われた。何より、Ｔ君のことを考えると辛く、同時に責任も感じていた。同じようなケースの報告が無いかどうか、国内外の文献をあさり、また移植の経験が多い施設と密にコミュニケーションをとりながら抜け道を模索した。結果として、Ｔ君の骨髄は兄のものにしっかりと置き換わっていることから、再度兄の骨髄を追加移植（注入）することが最善の治療と考えられた。少ないながら、国内外での報告例がその考えを後押ししてくれた。

さっそく、本人及び家族にそれらの説明をして理解を得たが、その時、いつも穏やかなＴ君がこわばった顔で、私に多くの質問を投げかけてきた。『それで、確実に良くなるんですか！』。彼が切実に、最も知りたい部分であった。今まで抑えていた感情が一気に噴出したかのように、彼の口調はいつになく厳しいものであった。私は気を引き締め、『Ｔ君、大丈夫だよ。』と言

いながら、心の中では『良くなって欲しい。』とつぶやいていた。

最初の移植から約８ヶ月が過ぎていた。再び兄より骨髄を採取し、前回のような強力な前処置をすることなく、注入（移植）した。その後は、実に期待した通りの経過となった。見事に血液の状態は回復し、２度と元の状態に戻ることは無かった。そして、その２ヶ月後（移植から１０ヶ月後）、晴れてＴ君は退院した。本当に長く、苦しい闘病生活であったが、彼はそれを見事に乗り越えた。

その後も彼との付き合いは続いた。もちろん医師と患者という立場であったが、私はそれ以上のものを感じていた。４年前に大学を飛び出し、福岡へ赴任したが、彼は時々はがきやメールで近況を知らせてくれた。

そんな彼が、結婚もして、函館にやってきた。嘘か本当か、『先生に逢いに行くんだよ。』、と言ってくれた。奥さんのお顔を見て、すぐに確信は持てなかったが、話を聞いて、当時、よく病院に見舞いに来られていた可愛らしい彼女であったことを知った。２人とも久しぶりの再会である。

大沼公園から函館市内に帰り、一日目の夜はみんなでビールを飲み、海の幸を食べながら、いつのまにか私たちは医師と患者ではなく、友として語り合い、楽しいひと時を過ごしていた。

あの時、Ｔ君は厳しい状況の中にいたが、その時の苦しさ、辛さ、楽しさ…、時間だけでなく、色々なものを少しでも共有できたことが、今の関係を作り出してくれたんだ、と私は酔いながら一人で思いに浸っていた。

（平成 15 年 1 月 27 日　著）